

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Ergativity of the Newar Language

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 長野, 泰彦 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004358

ネワール語の能格現象

長野 泰彦*

Ergativity of the Newar Language

Yasuhiko NAGANO

Newari, a Tibeto-Burman (TB) language spoken in Central Nepal, has had written documents since the 14th century and is the fifth oldest TB language with manuscripts. This language is now spoken by half a million people, most of whom inhabit the Kathmandu Valley.

Despite its long history and large population of native speakers, Newari has attracted relatively little scholarly attention, and there are few reliable publications on it. Much more research should be conducted on this language, since it has several important keys for examining the proto-TB morphosyntax, providing link among TB sub-groups.

This paper is a checklist on Newari ergativity. Ergativity has a close connection with pronominal morphology of TB, one of the good historical criteria of the language group. Bauman [1975] made an extensive comparison of pronominal aspects of TB, thus providing the global scope of TB transitivity types as well as split. However, he did not discuss Newari directly.

Stimulated by Bauman [1975] and DeLancey [1981], Givón presented a paper describing Newari ergative morphology. Although further analysis may be required, his paper provides the best starting point for the present work. This paper attempts to supplement that by Givón.

Ergativity is one of the most controversial morphosyntactic topics of TB linguistics. 'Ergative' is, as I understand it, one of the transitivity structures in which the transitive agent is marked syntactically and/or morphologically.

As Bauman pointed out [BAUMAN 1975: 221–222], TB has a variety of morphological types of ergativity, the appearance of

* 国立民族学博物館第1研究部

which varies among languages. Hayu, on the one hand, represents an extreme in which ergative markers consistently occur and no accusative type is observed. In some languages, on the other hand, a high optionality of markers (ergative and accusative) is seen. A very limited number of the TB languages are consistently ergative and many others belong to 'split-ergative' type. This will be further sub-classified according to the degree of optionality and mixture of case markers.

Newari is said to belong to split-ergative type; therefore, the description here will be focussed on how 'split' and/or 'mixed' it is in terms of ergativity.

- | | |
|--------------------|---------------------|
| 0. はじめに | 2. ネワール語における能格現象の事例 |
| 1. 能格現象の捉え方をめぐる諸問題 | 3. むすび |

0. は じ め に

ネワール (Newar) 語はネパール中央部を中心に話されるチベット・ビルマ (TB) 系の言語で、之を母語とする人々はネパール全土で50万弱、その内65%はカトマンドゥ盆地に居住している¹⁾。

この民族の歴史は不明な部分の方が多く、5世紀以前のことは全く分らない。史学的に存在を実証し得るネパール最古の王朝はリッチャヴィ (Lichhavi) 王朝であるが、この王朝の支配層として、ネワール族なのか、インド北部からの征服者なのかさえ、定説がない²⁾。その後数世紀の歴史的ブランク³⁾を経て、13世紀初め、アバヤ・マラ王がカトマンドゥ盆地を平定してマラ (Malla) 王朝が成立、14~15世紀には仏教・ヒンドゥー教双方の宗教文化が最隆盛期を迎えた。マラ王朝の出自は、伝承ではインドのタクールであるとされているが、マラ王朝最盛期の文化の担い手がネワール族であ

1) K. P. Malla 教授の御教示による。1961年のセンサスでは総人口38万7千、又、Bista [1976: 17] では40万となっている。

2) Ch. von Furer-Haimendorf [1956: 15-38] は、ネワールは5世紀以前からの先住者であるという。Regmi [1969] は、キランティとリッチャヴィ双方の祖先としてネワールを考えている。

3) チベット側の若干の史料は無い訳ではない。例えば、7世紀にはチベット王ソンツェン・ガンポにネパール王妃(の化身)が降嫁した。『赤冊史』は「(ソンツェン・ガンポは) ネパールからアンシュルヴァルマン王の娘ブリクティの化身、ネパール女ティツウンを娶り」と記している。彼女の入蔵時期は634年である。この間の事情については、[山口 1978] を参照。

ったことは実証されており、現存するネワール文献の古い層はこの時期の仏教文献である。

16世紀、マラ王朝はカトマンドゥ（カンティプール）、パタン（ラリトプール）、バドガオン（バクタプール）に分裂し、次第に衰退に向かう。1768年ゴルカ⁴⁾王プリトヴィ・ナラヤン・シャーはマラ系3王国を倒し、印欧系の言語を話す支配層によるゴルカ王朝が成立して、現在に至っている。

ネワールの歴史は、いわばインド文化（時としてチベット文化）との接触の歴史であり、それは4世紀には始まっていたと考えられている。高度に分化した職能カースト (cf. [BISTA 1976: 18–19; 石井 1980: 133–190]) や15世紀以降のネワール古典語に接するとき、我々はネワールの特に Sanskritization が緩やかに、しかし、極めて深く浸透している事を実感するのである。

0.1 このような状況のため、言語の面でも分からない面が多い。

普通TB祖語は、チベット語群、ロロ・ビルマ語群、チン語群、ボド・ナガ語群、カレン語群、に分類され、この他に諸語群の特徴を併せ持つ、所謂「媒介言語」⁵⁾が幾つかある。ネワール語をはじめとするネパール内のTB諸語は、このどこにも帰属が決定されていない。今のところ、全く地理的にTB's in Nepal としてまとめられているに過ぎない。

語彙の音形式の比較から、グルン、タカリー、マナン、タマンの4言語は1グループをなし、共通祖語を設定し得る段階に達している⁶⁾が、その他の言語群については記述資料が揃わないこともあって、研究が遅れている。小文で扱うネワール語も長い文献⁷⁾の歴史を有するにも拘らず、言語史にせよ、他言語との比較にせよ、本格的な研究は緒についたばかりと言わざるを得ない。筆者は語彙レベルでは、ネワール語、

4) マラ王朝後期には西ネパールとカトマンドゥ盆地の間に各々22侯国と24土侯国があり、統一の権力は無かった。漸次カトマンドゥに最も近い侯国ゴルカがチョウビシ、ジュムラ、バイシ、ガルワール等を抑え、遂にマラ王朝をも倒すに至った。その後東西に勢力を拡張し、3代目の王、ラナ・バハドゥール・シャーの時代には、ネパールの実効支配はガルワール（現在インド、ウッタルプラデシュ州東部）からシッキムにまで及んでいた。現在の国境が確定するのは、英国との所謂ゴルカ戦争（1814–16）後である。

5) 西田 [1978] の術語法による。媒介言語はTB諸語群の特徴を併せ持ち、各語群や語系を歴史的に継ぐ橋渡し役を演ずる。全語群を継ぐものとしてはギャロン（嘉戎）語（中国四川省西北部：cf. [NAGANO 1984]）やカチン（＝チンポー 景頗）語（ビルマ北部及び中国雲南省南部）があり、又、チン語群とボド・ナガ語群を継ぐミキル語がある。

6) タマン等の共通祖語再構を含む言語学的研究については [西 1977] が最良である。

7) ネワール古典語文献が従来ほとんど刊本になっていないことが、この言語の研究が進まなかった原因のひとつであるが、西独の Nepal Research Programme により古典文献の刊行が開始されようとしている、ときく。

ライ語⁸⁾、リンブ語⁹⁾は系統的に互に近いと考えており、更にボド・ナガ語群と共通する形式も散見されることから、ヒマラヤ南麓沿いの東から西への民族移動の可能性を仮に考えてはどうかと思っているが、音韻対応は余りに散発的であって、到底仮説を立て得る段階ではない。

又、形態手続の面では、非生産的ではあるが人称接辞（又はその痕跡）を留めていたり、動詞の動作方向、様態、アスペクトを示す接辞が数多く機能している等々、ネワール語にはTB祖語の再構に貢献する要素が少ない¹⁰⁾。Jørgensen [1941] は文語についてこれらに関する報告を発表しているが、体系的ではない。このようにネワール語はTB研究においてもっと注目を集めて当然なのであるが、今のところ研究状況は余り明るくない。

このような状況を改善するため、ネワール語に関する記述資料を積み上げてゆくことが急務であり、現にごく近年幾つかの論考が発表されるようになった¹¹⁾。小稿は格助辞と動詞の関係を明らかにする一助として、ネワール現代口語カトマンドゥ方言における能格現象を記述する。次章で述べる通り、能格性の意味づけや定義そのものが未だ安定していないから、この記述にも若干の問題点を残すであろうことは予測されないではないが、チェックリストとしての機能は果たし得ると思う。

0.2 前節に触れた通り、16世紀後半マラ王朝は3王国に分裂する。現代ネワール語方言はこの3王国の拠点——即ちカトマンドゥ、パタン、バドガオン——のそれである。この内、バドガオン方言が文語の特徴をより多く残しているという意味で保守的であり、カトマンドゥ方言が最も改新的である。

小稿で記述するのはカトマンドゥ方言であり、インフォーマントはトリブバン大学教授 Kamal P. Malla 氏である。同教授は同方言を母語とし、ネワール文法 [MALLA 1985] の著者でもある。調査は1984年7～8月、文部省科研現地調査「ネパールにおける国民形成過程の人類学的言語学的調査」（代表者：北村 甫氏）の一環として、カトマンドゥ市で行なった。

この現地調査報告は [NAGANO 1986] として既に英文で発表し、西田龍雄教授

8) ネパール東部キラント地区、ドゥード・コシとアルン川の本支流の谷間に分布し、約25万の話し手がいる。

9) リンブ (Limbu) 語はネパール東部キラント地区、タムール川流域に分布し、人口は約14万。ライ語とは系統関係があり、双方でキランティ語と総称されることがある。[WEIDERT & SUBBA 1985] が最も信頼できる資料である。

10) [CONRADY 1891] はこのことを最初に指摘した労作であるが、語彙の比較対象は主としてチベット語及び西ネパール諸語であり、又、形態手続の比較は行なっていない。

11) [GIVÓN 1983] は理論的には好論文であるが、インフォーマントの質に若干問題がある。

(京大)の主宰する研究会でも口頭発表した。それらに対して寄せられたコメントを参考に改訂を施したのが小文である。又、マラ教授との調査後、カトマンドゥ方言の別の話し手で、且つ、バドガオン方言をもよくする Iswaranand Shresthacarya 氏(西独 Nepal Research Project 研究員)とも同様の調査を行なったが、興味深い相異点も多いので、註の形で資料を挙げておくこととした¹²⁾。

0.3 略号表

A	agent (動作者)
agt.	agent (動作者)
AUX:E	auxiliary verb of existence (存在の助動詞)
AUX:S	auxiliary verb of statement (叙述の助動詞)
bnf.	beneficiary (受益者)
CAUS	causative (使役)
CLA	classifier (類別辞)
COP	copula (繫辞)
DAT	dative (与格)
DEM	demuniative (縮小辞)
ERG	ergative (能格)
FUT	future (未来)
goa.	goal (ゴール)
INF	infinitive (不定法)
IPF	Imperfective (未完了)
LOC	locative (於格)
N	noun (名詞)
NEG	negative (否定)
NP	noun phrase (名詞句)
NMR	nominalizer (名詞化のマーク)
P	patient (被動作者)
PRO	progressive (進行)
PTB	proto-Tibeto-Burman (チベット・ビルマ共通祖語)
ptt.	patient (被動作者)

12) シュレスタチャリヤ氏の発語表記はマラ氏のそれに standardize してある。

QUO	quotative (引用辞)
S	subject (主語)
TB	Tibeto-Burman (チベット・ビルマ)
V	verb (動詞)
VP	verb phrase (動詞句)

1. 能格現象の捉え方をめぐる諸問題

能格性は近年の言語の類型研究で注目を集めるようになった格関係に関するタイプのひとつで、大雑把に言えば、自動詞文の主語(Sと略す)と他動詞文の被動作者(Pと略す)が格の上で同じ扱いをうけ、他動詞文の動作者(Aと略す)が別の扱いをうける仕組みの総称である。チベット語はこの特徴を持っており¹³⁾、例えば、

lcags-Ø gser-du 'gyur.

iron-Ø gold-LOC change (VI)

鉄が金に変わる。

slab-dpon-gyis lcags-Ø gser-du bsgyur.

guru-ERG iron-Ø gold-LOC change (PFT: VT)

阿闍梨が鉄を金に変えた。

[山口 1974: 52-53]

のように、自動詞文の「が NP」(S)と他動詞文の「を NP」(P)である「鉄」は形態的にゼロマーク(無標)であるのに対し、他動詞文の「が NP」(A)である「阿闍梨」は-gyisによってマークされて(有標)いる。

これに対し、上の例文の日本語を見ると、自動詞文の S-NP も他動詞文の A-NP も共に「が」で格標示されており、一方、他動詞文の P-NP は「を」によってマークされている。従って、このような構文に関する限り、日本語は能格言語ではない。尚、このように P-NP が特に有標となる言語を「対格型」として能格型と対比させる考え方があるが、後に述べる通り、「能格」と「対格」は必ずしも同一レベルで論じられない面がある点は留意しておく必要がある。

1.1 能格性は確かに言語の一類型として興味深い現象であるが、この捉え方には

13) 詳細は拙稿 [1985a] 参照。

様々の立場があり、種々の解釈が示されている。小稿で扱う能格性を明確にするためにも、ここで能格の捉え方をめぐる諸々の問題点を書き出しておくことにしよう。尚、以下の議論の詳細については、[松本 1986] 及び [柴谷 1986] を参照されたい。

1.2 本章の初めに能格についての大雑把な捉え方を示した。格のあり方について、 $S=A \neq P$ となるのが対格型、 $S=P \neq A$ となるのが能格型、という訳である。これが伝統的解釈であり、広く受け入れられているものであるが、実はこの定義そのものに大きな矛盾が潜んでいる。

A (動作者) とか P (被動作者) とか言う概念はそもそも意味論的レベルのものであるが、自動詞文の「主語」(S) というのは統語上の問題であって、意味的には A の場合もあれば、P の場合もあり、E (経験者格) の場合もある。S を構成する「主格」(nominative) は「対格」とペアになりうる概念であるが、A や P とは異なる次元に属する。従って、この定義は意味機能と文法 (統語) 関係が混在した所産と言わねばならない。現に S に能格マークの付く言語があり、これを active language (動格型言語) と言うが、そこでは自動詞/他動詞の区別よりも、動作性の有無の区別に重点が置かれているのであり、そういった言語には古典的定義は当てはめられないのである¹⁴⁾。

ただ、nominal な格表示に限って言えば、類型として、 $S=A \neq P$ 及び $S=P \neq A$ という一見対照的なグループ分けができることが多いことは事実であるので、 $S \cdot A \cdot P$ という区分が極めて便宜的なものである点に留意した上で、小稿ではタームとしてはこの定義に沿うておく。

1.3 能格は基本的に名詞句の格標示という形で現れるものであるが、これ以外に動詞句内での人称標示——所謂 agreement (呼応)——として現れることがある。NP のみの標示、VP 内のみの標示、双方での標示、の三通りあり得るが、TB 諸語にはそのすべてがある。チベット語 (cf. 長野 [1985]) や小稿で扱うネワール語は NP の格標示のみ、リンプ語は VP のみ、ギャロン語 (cf. 長野 [1985b]) は双方である。

統語レベルにおける能格性には言語によって様々の現れ方があり得る。例えば、再帰化、関係節化、名詞句削除法、等を支配する syntactic pivot が、 $S=P$ であれば能格性を有することになる。

更に談話 (discourse) のレベルになると、談話の基幹を成すトピックの選択の仕方

14) cf. [MERLAN 1985]。

が、A よりも P の方に重点が置かれるなら、能格的性格を持つ、と言えないではない。例えば、ギャロン語の場合、形態レベルでの一致又は呼応 (agreement) が被動作者のトピック化と解釈され得る面が確かにある [長野 1985b: 593-594]。しかしながら、トピックそのものの定義に、まだ相当の「ゆれ」があり、又、能格性とトピック性は必ずしも平行しないとの主張も示されている¹⁵⁾ ことから、筆者としてはこの談話レベルでの議論には立ち入らないことにする。

小稿における能格性の扱いは、あくまでも形態論のレベルであることをお断わりしておく。

1.4 上記の三つのレベルの何れにおいても、能格性が原理として貫徹されている言語は極めて少ない。必ずと言ってよい程どこかに「漏れ」がある。ではその「漏れ」は何か？

従前それは対格的要素とされ、能格の分裂 (split) は、能格性と対格性の併存ないし混在として規定されてきたように思われる。しかし、少なくとも格標示の場合、TB 諸語における split は対格性を併存する形で具現しているのではない¹⁶⁾。むしろ動詞の意味或いは他動詞性と直接結び付いた分裂であり、対格性を考慮外に置いて充分成立する性格のものである。

そもそも、能格性というものは語彙の意味機能の問題であり、一方、対格性は談話をベースにしたそれであって、両者を同一レベルで比接すること自体に無理があると筆者は考えている。

2. ネワール語における能格現象の事例

前者で述べた能格性の捉え方を念頭に置き、ネワール語が能格言語であるのか否か、又、どの程度能格性が貫かれているのか、についての記述を本章に示す。

ネワール語が能格性を有するか否かの見通しを得るため、次の3文を比較しよう。

- (1) jigu kusā tan-a¹⁷⁾.
I-of umbrella lose-PFT
私のかさが無い。

15) 例えば [角田 1986]。

16) [BAUMAN 1975] では、TB 諸語を能格性について3つに分類し、能格型、能格と対格の mixed type、対格型を区別しているが、歴史的にみてゆくと、彼が対格マークとしているのは別の来源を持っていて、本来的な対格標識とは見做し難い。

- (2) ji: kusā tan-k-ā:¹⁸⁾
I-ERG umbrella lose-CAUS-PFT

私はかさを失くした。

- (3) ji wo-yā.
I come-PFT

私は来た。

自動詞文の「が名詞句」(S-NP)はゼロマークであるのに対し、他動詞文(2)では動作者「私」jiがji:となり、末母音の長音化及び鼻音化が起こり、且つ、被動作者は無標である。従って、一応ネワール語は能格性を持ち、能格は長母音化+鼻音化という形態手続によって具現されると仮設される。

しかし、次の2文では、ptt.は絶対格で現れていない。

- (4) jī: shrestha-yāta dā-yā.
I-ERG Shrestha-DAT hit-PFT

私はシュレスタを殴った。

- (5) jī: shrestha(-yāta) khan-ā¹⁹⁾.
I-ERG Shrestha(-DAT) see-PFT

私はシュレスタを見た。

文(5)では-yātaはオプションであるが、(4)では義務的である。「殴る」は高い他動詞性を持つものだから、能格-絶対格の組み合わせになって当然であるが、ネワール伝統文法という与格助辞を要求する。

以上5例から、ネワール語は能格性を示すけれども、他動詞文すべてが一貫した能格構文をとるのではなく、何らかの要因によって所謂 split を起こすと結論できる。

では、その要因は何か？ ネワール現代口語では人称接辞が生産的に機能しておら

17) ネワール語表記は[MALLA 1985: 3-18]による。例文は、1行目がネワール語、2行目が各形態の意味(英語と略号)、3行目が邦訳、である。

Shresthacarya 氏の発話(以下 IS と略す)では、

ji (-gu) kusā twaa-phi-ta.

I (-of) umbrella break-control-PFT

の方が自然だとのことである。twaa-phi は複合動詞で「置き忘れる」の意。全体として「どこかに忘れてきて、今かさが無い」ということであろう。

18) CAUS -k- があるので、失くす行為は意図的である。

19) IS では agt. は絶対格、与格助辞 -yāta は義務的である。

ず、又、その呼応も観察されないので、最も蓋然性の高い能格分裂の要因として、動詞の「意味」が考えられる。そこで筆者は動詞を意味によって次のように分類し、各グループ毎に例をチェックすることとしたい。この分類はチェイフ [1974] 及び Tsunoda [1982: 4AB] を参考に、筆者が行なった。

a) action

a1) action+process, (例えば「殺す」)

a2) action±process, (例えば「食べる」)

a3) action, (上記以外の動作で, ptt. の動作がこちら側にも働きかけてくるような関係を含むもの: 例えば「待つ」「探す」)

b) knowledge,

c) sense,

d) emotion,

e) possession,

f) potentiality.

2.1 先ず a1) の例として次の 8 文掲げる。

- (6) jī: cha-mha dhū: syā-nā²⁰.
I-ERG I-CLA tiger-Ø kill-PFT
私は虎を殺した。

- (7) wo manukhā: sī: pāl-a/dhyan-a.
that man-ERG wood-Ø cut-PFT
その男は木を切った。

- (7a) wo manukhā: sī: pāl-i.
that man-ERG wood-Ø cut-IPF
その男は木を切る (だろう)。

- (7b) wo manukhā: sī: pāl-ā con-a.
that man-ERG wood-Ø cut-INF stay-IPF
その男は木を切っている。

20) ネワール語では NP と類別辞付き NP の前後関係は何れでもよい。

- (8) wō: kathi beko-yā-k-a-la.
 he-ERG stick-Ø bend-CAUS-PFT
 彼は棒を曲げた。
- (9) shresthā: kap tachyā-ta²¹).
 Shrestha- ERG cup-Ø break-PFT
 シュレスタはコップを割った。
- (9a) jī: demā tachyā-nā.
 I-ERG plate-Ø break-PFT
 私は皿を割った (意図的)。
- (9b) jī: demā tachyā-ye lāta.
 I-ERG plate-Ø break-INF (unintentionally)
 私は皿を割ってしまった。

他動詞文の動作者は能格、被動作者は絶対格 (ゼロ) で現れ、この格関係は一貫している。

近年米国で所謂 volitionality (意欲性) が能格の出現を支配するとの主張が強い (例えば, [Givón 1983]) けれども, 意欲性=他動詞性と解するならともかく, 狭義の意欲性が TB 諸語の能格性を左右することはない。例文 (9a) (9b) はそのことを明確にしている。

又, 能格の分裂が動詞の時制, アスペクト, ムードによって支配される事実はイラン諸語やコーカサス諸語について早くから指摘されていた。このため, その原理が TB 諸語にも該当するかのような記述が散見される (例えば [DeLancey 1982]) が, これも誤りである。例文 (7) (7a) (7b) を比較すれば自明のことである。

2.2 動作主過程のグループの例として次のものがある。

- (10) shresthā: jigu kusā tan-k-a-la.
 Shrestha-ERG I-of umbrella-Ø lose-CAUS-PFT
 シュレスタは私のかさを失くした。

21) ネワール語の自動詞・他動詞の区別として *tajyā-ye* 「こわれる」 vs. *tachyā-ye* 「こわす」のような対立があり, チベット語とも平行する現象を示す。これに類する例として, 次の3例を挙げておく。

gu-ye 「裂ける」: *khu-ye* 「裂く」
gwa-ye 「輝く」: *khwa-ye* 「光らせる」
jwa-ye 「漏れる」: *chwa-ye* 「漏らす」

- (11) shresthā: kalamā²²⁾ pau co-yā con-a.
 Shrestha-ERG pen-INS letter-Ø write-INF stay-IPF
 シュレスタはペンで手紙を書いている。

- (12) ji-mi-sā:²³⁾ ta: -pu mye hāl-ā.
 I-PL-ERG many-CLA song-Ø shout-PFT
 我々は歌を沢山唄った。

- (13) jī: kusā to: t-ā.
 I-ERG umbrella leave-PFT
 私はかさを捨てた。

- (14) shresthā: cosā cha-pu nyā-nā con-a.
 Shrestha-ERG pen-Ø one-CLA buy-INF stay-IPF
 シュレスタはペンを買っている。

- (15) wō: chē da-nā con-a.
 he-ERG house-Ø build-INF stay-IPF
 彼は家を建てている。

- (16) jī: bista-yāta cha-gu saphu: bi-ye.
 I-ERG Bista-DAT one-CLA book-Ø give-IPF
 私はビスタに本を1冊与えた。

- (17) jī: mari na-yā con-a.
 I-ERG bread-Ø eat-INF stay-IPF
 私はパンを食べています。

- (18) wo misā: jā na-la.
 that woman-ERG rice-Ø eat-PFT
 その女は米を食べた。

22) 「ペン」は *kalama*, 鼻音化要素 ~ が具格標識である。ネワール語もチベット語と同様、能格マークは本来具格標識であった。尚, ~ の文語形式は -na である。

23) この ERG マークは -sā: である。例文 (7) でも, 「男」 *manu:* に対し, 「男」 + ERG は *manukhā:* となっていて, 不規則な形を示すが, これは本来サンスクリットであって, *manukha* が古形であり, 口語では *manu:* と変化しているが, 於格, 奪格, 能格の場合のみ, 古形が保たれている。この -sā: も同様の事情があると推測されるが, インフォーマントはよく分からないとのことであった。

- (19) wo manukhā: jyā yā-ta.
that man-ERG work(N)-Ø do-PFT
その男は仕事をした。
- (20) wo manukhā: jyā chu-ta.
that man-ERG work(N)-Ø start-PFT
その男は仕事を始めた。
- (20a) wo manukhā: jyā dhun-k-a-la.
that man-ERG work(N)-Ø end-CAUS-PFT
その男は仕事を終えた。
- (21) jī: tho chanta²⁴ jon-ā.
I-ERG that-Ø you-DAT catch-PFT
私はお前のためにそれをつかまえた。
- (22) chā: ji-ta: dā-la.
you-ERG I-DAT beat-PFT
お前は私を殴った。
- (23) wō: ji-ta: lākamā cwā-ta.
she-ERG I-DAT shoes-INS beat-PFT
彼女は靴で私を打った。
- (24) wo manukhā: chanta na-k-a-la.
that man-ERG you-DAT eat-CAUS-PFT
その男はお前を養った。

このグループにおいては、他動詞文の「が名詞句」(A-NP) は常に ERG マークが現れ、例文 (10)~(21) では他動詞文の「を名詞句」(O-NP) は絶対格をとっており、a1) と同様の格関係が観察される。例文 (22) から (24) では、O-NP には伝統文法という与格助辞が対応している。比較的他動詞性の高い「殴る」「打つ」「蹴る」も同様) のような動詞に絶対格が対応していないのである。このデータから見る限り、

24) IS では chanta の後に dhakā: 「……のために」が入る。

上の3文の O-NP は ptt. というよりはむしろゴールと、ネワール語では見做されると解釈せざるを得ないであろう。

2.3 a3) の類では、「探す」と「待つ」の例を挙げておこう。

- (25) jī: cosā mā-lā.
I-ERG pen-Ø look for-PFT
私はペンを探した。

- (26) jī chanta pi-yā con-e.
I-Ø you-DAT wait-INF stay-FUT
私はあなたを待っています。

- (27) jī bista-yāta pi-yā con-e.
I-Ø Bista-DAT wait-INF stay-FUT
私はビスタを待とう。

- (28) jī: bistā: jyā dhun-k-e-ta pi-yā con-e²⁵⁾.
I-ERG Bista-ERG work(N) end-CAUS-NMR wait-INF stay-FUT
私はビスタがその仕事を終えるのを待っています。

文 (26) (27) おいては、ERG-DAT の組み合わせとなり、「待つ」の基本パターンをなす。両文における「私」が jī: となる場合も *idiolect* としてはあり、充分文法的であるが、その頻度は低い。文 (28) において、複文における2つの *agt.* が共に能格を要求するのは、統語レベルでの能格性を探る上で興味深いが、今のところ筆者には比較材料が少ないので、このことについてはコメントできない。

文 (25) では *agt.* は能格をとる。「探す」はむしろ a2) グループに入れる方が適當かも知れない。

25) IS では、

jī: bista-yāta jyā sidhe-ku-gu pi-yā con-e.
私-ERG ビスタ-DAT 仕事 終わる-CAUS-NMR 待つ-INF 留まる-FUT

の方が自然とされる。この場合だと、文 (26) (27) と完全な平行性を示す。IS によれば、カトマンドゥ方言口語では *bista-yāta* だが、本来 *bistā:-yāta* であり、バドガオン方言では口語でもこの形式を保っている。

2.4 b) 知識を示すものの例として、次の7文を挙げる。

- (29) wō: shrestha mha²⁶⁾-syu:.
 he-ERG Shrestha-Ø CLA-know(PFT)
 彼はシュレスタを知っていた。

- (30) shresthā: wo bhāe thu:²⁷⁾.
 Shrestha-ERG that language-Ø understand(PFT)
 シュレスタはその言葉を理解した。

- (31) jī: woyāgu nā loman-a.
 I-ERG he-of name-Ø forget-PFT
 私は彼の名前を忘れた。

- (31a) jita: woyāgu nā loman-a²⁸⁾.
 I-DAT he-of name-Ø forget-PFT
 私は彼の名を失念した。

- (32) jī: woyāgu nā lumā:²⁹⁾.
 I-ERG he-of name-Ø remember
 私は彼の名を覚えている。

- (32a) jita: woyāgu nā lumā:.
 I-DAT he-of name-Ø remember
 (同上)

- (33) jī: woyāgu nā luman-k-ā.
 I-ERG he-of name-Ø remember-CAUS-PFT
 私は彼の名前を思い出した。

26) この類別辞は animate なものに対して用いられる。

27) 語幹は thu である。

28) IS の発話では (31a) の方が (31) よりはるかに自然だとのことである。この文は直訳すると、「彼の名は私にとって忘れられた状態にある」となる。

又、この動詞は次のような興味深いペアをなす：

loman-e 「忘れる」

luman-e 「憶えている」

luman-k-e 「思い出す」

29) IS 及びマラ氏双方とも、(32) より (32a) が自然な発話と答えている。

(29) (30) (33) では能格-絶対格のセッティングとなるが, (31)~(32a) では能格/与格-絶対格の組み合わせを要求する。特に (30) (33) の様な動作性の相対的に高い動詞では能格構文をとり, (31)~(32a) といった, より状態性の強い動詞では, 能格をとれば動作, 与格をとれば状態, という風に区別をつけ得るということであろうかと思われる。

2.5 c) 感覚を表す動詞では次の様な変異が観察される。

(34) jī:³⁰⁾ shrestha(-yāta) khan-a.

I-ERG Shrestha(-DAT) see-PFT

私はシュレスタを見た。

(35) jī: wo-yāta khan-i ma-khu.

I-ERG he-DAT see-FUT NEG-COP

私は彼に会いません。

(36) jī: jhanga: hā: -gu tā:³¹⁾.

I-ERG bird cry-NMR hear

私は鳥が鳴くのが聞こえた。

(37) jī: jhanga: hā: -gu nyan-ā.

I-ERG bird cry-NMR listen to-PFT

私は鳥が鳴くのを聴いた。

(38) jī: attar bās tā-yā.

I-ERG perfume good smell feel-PFT

私は香りをかいだ。

(38a) jī: attar-yā na-tā-yā.

I-ERG perfume-GEN smell(N)-feel-PFT

(同上)

(38b) jī: attar-yā-na tā-yā.

(同上)

30) IS では jī も可。

31) IS バドガオン方言では tāyā。

すべての agt. に ERG 標識が現れるが、O-NP が与格と絶対格とに分裂している。(36) (37) には NMR が対応し、(38) (38a) (38b) は「香り」という full noun であるからさして問題はない。問題は (34) (35) である。与格助辞 -yāta の出現が (34) では任意的、(35) では義務的になっている事実、及び例文 (22) を考え合わせるならば、ネワール語においては、ゴール性の高い O-NP 程与格マークをとり易く、絶対格になりにくい、と解釈するのが妥当であろう。

2.6 d) 感情を表わすものでは、その動詞語幹により、格の要求の仕方に相当の幅がある。

- (39) bistā: ji-ta: nhāpā ma-hi:.
Bista-ERG I-DAT formerly NEG-tolerate
ビスタはかつて私を嫌っていた。

- (40) ji-ta: sharmā ya:³²⁾.
I-DAT Sharma-Ø like
私はシャルマが好きだ。

- (41) ji-ta: cosā māl-a.
I-DAT pen-Ø need-IPF
私はペンが要る。

- (42) wo misā: sukhi jui-gu so-la³³⁾.
that woman-Ø happy become-NMR pretend-PFT
その女は幸福になることを望んでいた。 (imitate)

- (43) wo manukhā: jā na-ye-ta³⁴⁾ so-la.
that man-ERG rice-Ø eat-INF-NMR want-PFT
その男は米を食べたがった。

32) 「好き」に対して「愛する」という動作性の強い語幹を使えば、ji: sharma-yāta yae-k-a. のように、ERG-DAT の格関係が具現する。ya: を他動詞とすること自体に問題があるのかも知れない。

33) sukhi は本来サンスクリットで、「ハッピーになりたかった」とでも訳すべきであろうか。ネワール語プロパーでは「幸福になる」という表現は無い。「幸福であることを望んだ」であれば、
wo misā: laeta-e-ta swo-ta. 又は、
wo misā: laeta-e-gu swo-ta.

の何れかになる。第1文の -ta は与格、第2文の -gu は NMR である。

34) IS では -ta ではなく、-gu が出る。

- (44) wo manukhā: dugu-cā na-i dhakā³⁵⁾ wo misā gyā-ta.
 that man-ERG goat-DEM eat-FUT QUO that woman fear-PFT
 その女は、男が山羊を食べるのではないかと恐れた。

このグループの基本は文 (40) (41) に見られる DAT-ABS の組み合わせで、所謂 dative subject 構文と思われる。(39) は「嫌う」というやや行為性の強い動詞の意味の故に、c) 感覚の類に入れておく方が妥当かも知れない。(42)~(44) は ABS-NMR/QUO の組み合わせであり、主語の位置に立つものは agt. というよりはむしろ経験者であるから、能格性の議論になじまない可能性がある。但し、従文中の動作者 (文 (44) の「男」) は ERG, ppt. の「米」は ABS で現れ、能格性を保っている³⁶⁾。

2.7 e) 所有では (45) のような所謂 genitive subject 構文が専ら用いられる。

- (45) wo manu: -yā ni-mha macā du.
 that man-of 2-CLA child AUX: E
 その男には子供が2人ある。

- (46) tho keba ji-gu kha:.
 that garden I-of AUX: E
 その庭は私のです。

(46) は (46a) ji-gu tho keba du. 「私には庭がある」ともできるが不自然な発話である。(46) そのものは能格性の議論にはなじまない。

2.8 f) 潜在性・能力を示す表現として次の4文を掲げる。

- (47) wo manu: na-ye phu-mha ju-la³⁷⁾.
 that man-Ø eat-INF can-CLA become-PFT
 その男は食べられるようになった。

- (48) wo manukhā: na-ye phu.
 that man-ERG eat-INF can
 その男は食べることができる。

35) dhakā は既に熟した QUO であるが、本来 dha-ye 「言う」に来源を持つ。

36) 従文における split については、未だ調査が不十分で、明らかでない。

37) この文に目的語——例えば米——を挿入しても格表示は変わらない。

- (49) wo manu: den-e phu.
that man-Ø sleep-INF can
その男は眠ることができる。

- (50) wo manu: den-e phu-ta.
that man-Ø sleep-INF can-PFT
その男は眠ることができた。

(48) と (49) (50) を比較すれば最も明確であるが、他動詞であれば **ERG-INF+AUX**、自動詞なら **ABS-INF+AUX** の形式をとる。(47) の場合は **AUX** の後に「……になった」があるため、**agt.** はそちらに呼応しており、「食べる」には対応していない。

2.9 これらのデータをもとに、a1) から f) までの格助辞の生起の仕方をまとめてみると次表が導かれる。

<u>group</u>	<u>subject position</u>	<u>object position</u>
a1	ERG	ABS
a2	ERG	ABS
	ERG	DAT (goa.: 打つ, 与える, 蹴る) (bnf.: 養う)
a3	ERG	ABS
	ABS	DAT (待つ)
b	ERG	ABS
	DAT	ABS (忘れる, 憶えている)
c	ERG	ABS
	ERG	DAT (見る)
d	DAT	ABS
e	GEN	ABS
f	ERG	(INF+AUX)

ここから帰納されるのは、a1) a2) においては能格性が貫かれるが、a3) b) c) になると 能格-絶対格 の組み合わせ以外のものが現れ、d) e) においては b) c) にも生

起する DAT-ABS (f では GEN-ABS) のセットがドミナントになる、ということであろう。f) では object position が INF+AUX で占められるから、一応能格性の問題の埒外に置いておく。

筆者の動詞分類では、a) が最も動作性が強く、f) に向かって漸次それが減るのであるが、このことと上記の格のコンビネーションとを較べるならば、a1) 動詞が他動詞構文を作り易く、——換言すれば、能格構文を貫き易く、動作性(ないし行為性)が薄くなるにつれて能格性の一貫性が少なくなり、d) e) では全く現れなくなる、と結論される。

このようにネワール語の能格現象は動詞の意味に sensitive であり、これが split を起こす主要な因子なのである。

2.10 上記がネワール語における能格現象のアウトラインだが、これで解釈のつかぬ事例は幾つもある。中でもこれからの検討課題として興味深い事例を3つ挙げておく。

2.10.1 先ず、所謂同族目的語をとるものの例として「夢をみる」を見ておこう。次の4文を比較されたい。

(51) ji-ta: mhagasae: mhan-a.
I-DAT dream(N)-LOC dream(V)-PFT
私は夢をみた。

(51a) ji mhan-a.
I-Ø dream(V)-PFT
私は夢をみた。

(52) ji: jimi abu mhagasae: mhan-a.
I-ERG my father dream(N)-LOC dream(V)-PFT
私は父の夢をみた。

(53) ji: phukijā si-gu mhagasae: mhan-a.
I-ERG cousin die-NMR dream(N)-LOC dream(V)PFT
私はいとこが死にそうになっている夢をみた。

(52) (53) は基本的に同じ構造であり、夢みる対象が NP として現れ、「NP を夢に

夢みた」という表現方式をとる。この場合「夢みる人」(この場合は *ji*) は ERG マークされて, *ji*: となる。

mhan は他動詞であるから, 上の類推でゆけば (51a) は **ji: mhan-a* となることが予想されるが, この文は文法的であっても実際には使われない。普通の発話では (51) のようになる。名詞「夢」に LOC マークがついたものがあるのに, 夢みる対象となる NP が顕現しないからといって, 何故に経験者が与格支配を受けるのか, 今のところ納得のゆく解答が見出せない。ロシア語やタミル語との比較を試みる必要があらう。

2.10.2 (54) *tho saphu: -yā so-takā tu:.*

this book-of 3-taka cost(PFT)

この本は3 ルピー (通貨単位) した。

e) 所有の例文 (45) と同様 GEN-ABS の組み合わせを示している。GEN でなく DAT になっていれば, 例文 (40) (41) と同じグループに入ることによって解決がつくが, *genitive subject* 構文をとる合理的説明はつかない。尚, 文 (45) (54) の場合, ネパール語が同一構造を示すことも考慮すべきかも知れない³⁸⁾。

2.10.3 (55) *chā: na-ye pityā-ta.*

you-ERG eat-INF hungry-PFT

あなたは空腹だった。

「腹がへる」は意味的に自動詞である。この動詞は自然な発話では *chā: naepityā-ta* のように, 1 語幹とされているため, ネワール語を, 自動詞にも ERG が対応する動格型言語とする考え方もある。しかし, 筆者はその語幹は *na-ye pityā-ye* という基底形式に分節でき, しかも目的語の位置に立つものが INF である形に対して *agt.* なり経験者が ERG で呼応する例は, 小文にも数多く観察されるのであるから, 動格型言語とするのは慎重を欠く仮説だと考える。

しかしながら, IS では *chā: pityāta*. も文法的であるとのことなので, *pityā-ye* そのものの意味指定をもう少し精密に考えておく必要は依然として残る。

38) 崎山理氏の御教示によれば, ミクロネシアのチャモロ語にも平行する現象がある。

3. む す び

以上の記述からネワール語における能格性の概要と能格の分裂の条件が明らかになった。

TB 諸語には能格分裂の要因に3つのタイプがある。1つはネワール語やチベット語のように動詞の意味に sensitive なもの、1つは人称接辞の呼応のあり方が様々な条件によって分裂するもの、いま1つは、例えばカチン語のように、本来 focus 標識だったものが能格標識に機能を拡張した、又はしつつあることに起因するものである。

ネワール語の場合、他の2つのタイプに関わる事象は現代語においては観察されないけれども、この最も改新的な分裂条件は、語史がもっと分かってくれば、例えば人称接辞の呼応と関係があった可能性は否定できない。小文で用いた動詞の意味分類をも含め、ネワール文語での能格現象も近い将来精査する必要がある。

謝 辞

小稿は0.2に述べた通り、文部省海外学術調査（代表者：北村甫）の成果の一部である。調査の機会を与えて下さった北村教授、ネワールに関する情報提供を惜しまれなかった石井溥氏（東京外大 AA 研）に対し、深甚の謝意を表したい。

又、筆者の質問に辛抱強く答えて下さったマラ教授とシュレストチャリヤ氏にも厚く御礼申し上げます。

文 献

雑誌略号は Shafer 1957: *Bibliography of Sino-Tibetan Languages*, Wiesbaden による。これ以後のものは下記の5件を除き、略記していない。

LTBA	Linguistics of the Tibeto-Burman Area
OPWSTBL	Occasional Papers of the Wolfenden Society on Tibeto-Burman Linguistics
S-T Conf	International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics
TUFS	Tokyo University of Foreign Studies

BAUMAN, J.

- 1975 *Pronouns and Pronominal Morphology in Tibeto-Burman*. Ph.D. dissertation, University of California, Berkeley.
- 1976 *An issue in the subgrouping of the Tibeto-Burman languages: Lepcha and Mikir*. Circulated at the 9th S-T Conf., Copenhagen.
- 1979 A historical perspective on ergativity in Tibeto-Burman. In Plank (ed.), *Ergativity*, New York: Academic Press, pp. 419-434.

- BENEDICT, P. K.
 1972 *Sino-Tibetan: A Conspectus*. Cambridge: University Press.
 1979 Four forays into Karen linguistic history. *LTBA* 5(1): 1-36.
- BISTA, D. B.
 1976 *People of Nepal*. Kathmandu: Ratna Pustak Bhandar.
- CAUGHLEY, R. & K. CAUGHLEY
 1970 Chepang texts. *Tone Systems of Tibeto-Burman Languages of Nepal* Pt. 4, Texts 2: 1-130, OPWSTBL 3, Urbana.
- チェイフ, W. L.
 1974 『意味と言語構造』大修館書店, 東京。
- COMRIE, B.
 1973 The ergative: variations on a theme. *Lingua* 32: 239-253.
- CONRADY, A.
 1991 Das Newari. *ZDMG* 45: 1-35.
- CSOMA, de Kőrös
 1834 *A Grammar of the Tibetan Language in English*. Calcutta.
- DELANCEY, S.
 1980 *Deictic Categories in the Tibeto-Burman Verb*. Ph.D. dissertation, Indiana University.
 1981 An interpretation of split ergativity and related patterns. *Lg* 57(3): 626-657.
 1982 *Lhasa Tibetan: a case study in ergative typology*. ms.
- DIXON, R. M. W.
 1979 Ergativity. *Lg* 55: 59-138.
- FILLMORE, Ch. J.
 1968 The case for case. In B. Bach & R. T. Harms (ed.), *Universals in Linguistic Theory*, New York, pp. 1-88.
- FRANCKE, A. H.
 1909 Tabellen der Pronomina und Verba in den drei Sprachen Lahoul's: Bunan, Manchad und Tinan. *ZDMG* 63: 65-97.
- FURER-HAIMENDORF, Ch. von
 1956 Elements of Newar social structure. *JRAS* 86 (2): 15-38.
- GIVÓN, T.
 1983 *Ergative morphology and transitivity gradients in Newari*. Circulated at the 16th S-T Conf., University of Washington, Seattle.
- GLOVER, W. W.
 1974 *Sememic and Grammatical Structures in Gurung*. Kathmandu: S.I.L.
- GREENBERG, J.
 1966 Some universals of grammar with particular reference to the order of meaningful elements. In J. Greenberg (ed.), *Universals of Language*, Cambridge: M.I.T. Press, pp. 73-113.
- GRIERSON, G. (ed.)
 1909 *Linguistic Survey of India*. Calcutta.
- GRÜSSNER, K.-H.
 1978 *Arleng Alam: die Sprache der Mikir*. Wiesbaden.
 1982 *Mikir Dictionary*. ms.
- HALE, A.
 1973 On the form of verbal bases in Newari. In Kachuru (ed.), *Issues in Linguistics*, pp. 279-299.
 1979 *Newari: a thumbnail sketch*. ms.
 1980 Person markers: finite conjunct and disjunct verb forms in Newari. In R. L. Trail (ed.), *Papers in South East Asian Linguistics* 7: 95-106.
- HASHIMOTO, M.
 1977 The Newari Language. *Monumenta Serindica* 2. TUFS.

HOPPER, P. & S. THOMPSON

1980 Transitivity in grammar and discourse. *Lg* 56: 251-299.

石井 溥

1980 『ネワール村落の社会構造とその変化』東京外大 AA 研。

JØRGENSEN, H.

1936 Linguistic remarks on the verbs in Newari. *Acta Orientalia* 14(4): 280-285.

1941 *A Grammar of the Classical Newari*. Copenhagen.

金 鵬

1949 Etude sur le Jyarong. 『漢学』3: 211-300。

金 鵬 *et al.*

1957 「嘉戎語校磨話の語言和形態」『語言研究』2: 123-151。

1958 「嘉戎語校磨話の語言和形態」『語言研究』3: 71-108。

KÖLVER, U.

1976 *Satztypen und Verbsubkategorisierung der Newari*. München.

KÖLVER, U. & B. KÖLVER

1978 Classical Newari verbal morphology. *Zentralasiatische Studien* 12: 273-316.

林 向荣

1982 「嘉戎語构詞法研究」S-T Conf., 北京 (『民族語文』3: 47-58 に再録)。

MALLA, K. P.

1985 The Newari Language: a working outline. *Monumenta Serindica* 14, TUFs.

MATISOFF, J. A.

1980 *The Languages and Dialects of Tibeto-Burman*. ms.

松本克己

1986 「能格性に関する若干の普遍特性」『言語研究』90: 169-190。

MERLAN, F.

1985 Split intransitivity. In J. Nichols (ed.), *Grammar Inside and Outside the Clause*, Cambridge, pp. 324-362.

MICHAILOVSKY, B.

1982 *La Langue Hayu*. Ph.D. dissertation, University of California, Berkeley.

NAGANO, Y.

1984 *A Historical Study of the rGyarong Verb System*. Tokyo: Seishido.

1986 A checklist of Newari ergativity. *Monumenta Serindica* 15: 167-186. TUFs.

長野泰彦

1984a 「ギャロン語の方向接辞」『季刊人類学』15(3): 1-52。

1984b 「嘉戎語の動作の様態を示す接辞」『国立民族学博物館研究報告』9(3): 483-519。

1984c 「嘉戎語の人称接辞」『国立民族学博物館研究報告』9(4): 711-745。

1985a 「チベット語の能格助詞と動詞の意味」『日本西藏学会々報』31: 1-5。

1985b 「嘉戎語の能格性」『国立民族学博物館研究報告』10(3): 575-601。

1986 「チベット・ビルマ系諸語における能格現象をめぐって」『言語研究』90: 119-148。

西 義郎

1977 「Tamang 祖語の再構をめぐるいくつかの問題について」『鹿児島大学教養部史学科報告』26: 53-68。

NISHI, Y.

1980a *Classification of Some Tibetan Dialects of Nepal*. Handout at the 1st Annual Conf. of the Linguistic Society of Nepal, Kathmandu.

1980b *A Comparative Word-List of Tamang, Gurung and Thakali*. ms.

1982a *A Brief Survey of the Linguistic Position of Ghale*. Circulated at the 15th S-T Conf., Peking.

1982b *Swadesh 100 Word-list for Some Languages of the Mon-pa group*. ms.

西田龍雄

1957 「チベット語動詞構造の研究」『言語研究』33: 21-50。

- 1960 「カチン語の研究」『言語研究』38: 1-32。
 1970 『西番館譯語の研究』松香堂, 京都。
- PLANK, F. (ed.)
 1979 *Ergativity*. New York: Academic Press.
- PLANK, F.
 1979 Ergativity, syntactic typology and universal grammar. In Plank (ed.), *Ergativity*, New York: Academic Press, pp. 3-38.
- 瞿 霽堂
 1982 「嘉絨語動詞人称范疇」S-T Conf., 北京 (1983『民族語文』4: 35-48 に再録)。
 1984 「嘉戎語概況」『民族語文』2: 67-80。
- REGMI
 1969 *Ancient Nepal*. Calcutta.
- SCHUBERT, J.
 1937 *Tibetische Nationalgrammatik*. Leipzig.
- SHAFFER, R.
 1950 Classification of some languages of the Himalayas. *Journal of Bihar Research Society* 36: 192-214.
 1966, 67, 74 *Introduction to Sino-Tibetan*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- 柴谷方良
 1986 「能格性をめぐる諸問題」『言語研究』90: 75-96。
- 柴谷方良・角田太作
 1982 「言語類型論の最近の動向」『月刊言語』(II-4): 100-108。
- SILVERSTEIN, M.
 1976 Hierarchy of features and ergativity. In Dixon (ed.), *Grammatical Categories in Australian Languages*, pp. 112-171.
- SRESTHACHARYA, I.
 1981 *Newari Root Verbs*. Kathmandu: Ratna Pustak Bhandar.
- 角田太作
 1980 「能格性におけるある意味条件とケースマーキング」『言語研究』78: 141-152。
- TSUNODA, T.
 1982 *A Re-definition of 'Ergative' and 'Accusative'*. Circulated at the 13th International Congress of Linguists, Tokyo.
 1986 *Ergativity, accusativity and topicality*. 第92回日本言語学会シンポジウムで配布。
- WALKER, G. D.
 1925 *A Dictionary of the Mikir Language*. Shillong.
- WATTERS, D.
 1973 Clause patterns in Kham. In A. Hale & D. Watters (eds.), *Clause, Sentence, and Discourse Patterns in Selected Languages of Nepal* 1: 39-202, Kathmandu: S.I.L.
 1975 The evolution of a Tibeto-Burman pronominal verb morphology. *LTBA* 2(1): 45-79.
- WATTERS, D. & N. WATTERS
 1973 *An English-Kham Kham-English Glossary*. Kathmandu: S.I.L.
- WEIDERT, A. & B. SUBBA
 1985 *Concise Limbu Grammar and Dictionary*. Amsterdam: Lobster.
- WOLFENDEN, S. N.
 1929 *Outlines of Tibeto-Burman Linguistic Morphology*. London: Royal Asiatic Society.
 1936 Notes on the Jyarong dialect of Eastern Tibet. *TP* 32: 167-204.
- 山口瑞鳳
 1974 (仮題)『チベット語文法』(東京大学での講義用テキスト: Xerox 版)。
 1978 「七世紀前半の吐蕃とネパールの関係」『東京大学文学部文化交流研究施設研究紀要』2-3: 29-57。